

第五話 紅花商人の教えた花買心得

大藤村の稲村家は、中世末期からの旧家でありますが、近世の初頭から、あの山中や五百川郷あたりの青芋や漆や木の奥といったような特産物を商って次第に産を大にし、中期頃からは紅花にも手を出し、最上地方でも屈指の荷向屋となりました。所が天保頃の当主七郎右エ門が死亡した後、家督を嗣いだ者が非常に幼少であつたために、その親戚に当る山形の村居新六郎という人が後見人となつて、稲村家の家業を支配し、上方との商業取引関係を益々盛にしました。この新六郎は余程の才物であつたと見え、天保八年（一八七三）に、幼主成長後のためをおもんばかり、商人としての気構えや商法の心得というようなことを、事こまかに書き残し、これに「微量骨算」一名を「微量可笑記」と名づけました。先づ最初に、商人として立つて行く者の一般的な態度心得に觸れ、その頂の結びとして、
「是は幼年の人々を取立のため、家を大争と思ひ、少しも利根になれかすと、奥義心一盃書き置くものなれば、外の人が見てわらふとも、予は屁とも思はぬ。併し噂にかけ、影で笑ふ給ふ事は、深切に書き与えしことに免じ下さるべく候」と、この書の目的と、書き残すための誠意とを述べ、次に諸品の売買等につき、具体的にその心得を示しております。そして、第一の算術として「紅花の術」というものを書いておりますので、その内容を御話いたしませう。

その冒頭に「紅花諸方え差向候に付、仕入場より（拱り）申事しと言つて、仕入場の拱定が大切だとし、後に述べる所の産出地と品質との関係の伏線とされています。それに続いて経費のことに觸れ、「近国共に紅花買口作り、口銭重荷を駄に付金式歩宛也。外に止り（泊り）費の分は、茶代として、其料はたこ（旅籠）共に見当差置き申すべき事」と述べておりますが、近国にも買場を作るためには、その買付仕入量と口銭との関係、仕入日数と宿泊料の予定等、細かく計算に入れておかないと、思わぬ損失を招くことを注意しております。

次に「羽州にて紅花宜敷き所御存知にてもし」という書出で、産地の大略を並べておりますが、

最上地方

山形より宝沢、高湯、上野、上平、五めら辺り、長崎、谷地、小松沢、長瀬

此外天童附近

をよれとし、「尤も其年々の出来不出来は何方にもあることしなれば、商人としての仕入に際しては「是を早く見付け申すべき事」が重要であると教えております。最上紅花が全国でも一二位を争う特産物として、元禄年間に出版された「日本産子」に「買物調方三合集」に「日本国花万葉集」等に紹介されていますが、その評判は奥原と共に、明治初年まで続き、皇室や公家や幕府関係の使用される優良品は、殆ど最上紅花であつたのです。しかし村居も言っているように、紅花の栽培法や干花の製造技術というものが、非常にむづかしいばかりでなく、その年の天候や、開花期の晴雨に影響を受け易く、その適否が値段を

左右したので、荷主としても、その手先となる仲買人にしても、買付けのためには余程の注意が必要でありました。次に

米澤地方

仕入れの出来るのは公料分に限る。

其外は藏花である。

高畑刃、山崎新田、鳥井町、この刃一ばんよし。

郡山東西五ヶ村、悪津刃よし。

とありますように、米澤地方で自由仕入れの出来るのは、いわゆる幕府直轄地産のものだけであり、上杉藩領から出るものは、藩の財政々策上、総て「藏花」と称して藩に納入し、藩がまとめて専売する方法を採用していたのです。従つて藩の公示によつて入札でモレない限り、「藏花」を買取することは出来ませんでした。稲村家がこの「藏花」を買つたかどうか、私の手持ちの資料では判明しませんが、享和四年（一八〇四）の仕切によりますと、同じように米沢藩の専売であつた「御藏蠟」五百匁を、約九百五拾三匁で買つている事実もありますので、彼の財力からすれば、「藏花」も或は落札しているかも知れません。仙台方面の紅花は、最上紅花と共に、品質のいゝことで有名であり、「重訂本草綱目啓蒙」には「奥州仙台より出ると上品とす。羽州の山形これに次ぐ。同州谷智、奥州の三春これに次ぐ」とあり、この本の出た弘化四年（一八四七）頃には、最上を越して第一の評判を得ておりました。村居はこの仙台方面の産地として、次のように上げております。

奥仙台

藤澤町 岩谷堂町 水沢町 前沢町 ぼろわ村この辺よレ

南部

花巻町よレ

南仙台

坂下近辺 富田 宝沢 ざる川 中田よレ

是より

源原 丸森 角田 清水 三みう 大川原 玉崎よレ

稲村家では以前から仙台花の仕入れにも当っていたものと見えまして、例えば（一七九四）の紅花仕入帳に「最上仙台紅花仲向」というのが残っており、その方面の集荷責任者として、山形十日町の村井清七が当っておりまして、その時の記録によりますと、

仙台花買口

⊗ 仙花 宮、村田分

× 五百九拾袋

酒田着

代金五百三拾兩三分ト永三匁七分

内

横町勘右エ門五分

スツ割三金百九拾九兩永四匁二分八七

引残而全仲向分

八ツ割五金三百三拾壹兩貳分永廿三匁八分一

と見えております。仕入資金の出資は稲村と山形横町の勘右エ門が共同とレ、村居が中心の責任者となり、何人かの仲買仲間を連れて仙台方面に赴き、宮や村田地方の紅花を買集めておるのです。レかも紅花五百九拾袋は、山形、大石田、酒田廻りの送路を経て京都に出しておる訳です。村居が稲村の資金を動かして、この年八月まで仕入れたものは、最上分と仙台分とを合して、約九百四拾兩貳分余あります。

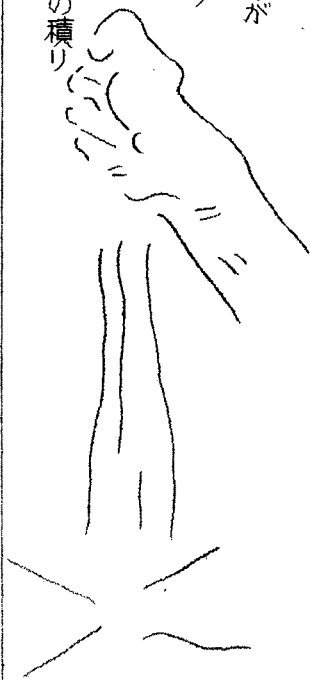
以上で仕入場所の撰定に關する概要を終り、次の章には、花の買方についての注意を述べております。先づ生花を買うには、大雨中雨小雨の場合、風が吹き、夜は曇つて露のない場合、夜はよく晴れて露が多く降つた場合等、また沢辺、川辺、大沼辺附近の畑等、天候や場所によつてその買ひ方に差がある、それは花に含む水分の量に相違が生じ易いからであると言ひ、「是は霧ふかくれて、水目方になり、花はよるべく候へ共、揚り高値に成り候向、心得申すべき事」と教えております。

レしかレこの含有水分の鑑定は中々むづかしいので、次のような絵を挿入して説明を加えております。

是は三介が

うでなり

是は水露の積り



その説明を表にしてみますと、

右の小水花^{いさばな}を握り詰めて見て、

ザアザア 六百貫目位

たたら 三百五十貫目位

ぼたぼた 三百貫目位

ぼたりぼたり 二百五十貫目位

ぼたり 二百貫目位

露気 百五十貫目位

照花 九拾貫目く百二三拾貫目

右をもつて後は割弁懸引の事

とあります。干花巻駄を出二貫目とすれば、小水花の目方の基準は以上のようなものであるとしておりますが、「紅藍着説」に「紅花を得る分量は、其年の出来方と土地によりて大差あり。一段の地より花辨を収ること凡そ三十貫目、乾花は此十分の一也。即ち三貫目じとあり、これと比較すれば、前表の「ぼたぼた」あたりが一般的な標準であつたと思われまゝ。前日未の雨が、夜半過ぎから霽れても、普通の人は雨花と心得て、下値に買おうとし易いが、そのような天候の場合には、速早く花を握って見る必要がある。「思いの外風にて、雨水を吹き貫き、花ちゞれ、生花目方いらすに干揚り申す」こともあるので、その時々^{々々}の生花の状況をよく勘案し、「懸引見込みの計事」を立てなければならぬと言っておりますが、この辺の見立てが買人としての大切な骨であつたのでしよう。

次に干花の買方がありますが、このことに就いて村居は「干花目利は大変にあり、筆にも口にも申兼ね候事なり。なれ共、大略の大握みの所は」と言つて記しているところをみますと、先づ「干花薄く、さりざりとさけ、さけ口の光り有るもの」が最もよく、「粉入花」と言われる不正品は、餅は厚く、目方もか、り、割けぬものである、また悪徳者になると、目方がかゝるように砂等を加えて干すような場合もあるので、能く能く見分けることが肝要であると言つています。

レかしながら、その品物の善悪や、上、中、下、下々の段付け、或は一駄一駄の格付けのようなことは、特に段階の多い紅花のことであるから、「中々今丸葉の如く書置き申すべき様これ無く」「追々見覚え成さるべく候」と、目利の修練ということを第一に教えてあります。人の話を聞いたリ、物の本を読んだり、耳目の学問だけではどうにもならないというのが、仕入商人たる者の常で、飽くまでも自ら品物に多く接し、目利の感所を握ることが大切なのであります。「上手上手の目利は、金歩歩とも違い申さざるもの也」とは、経験第一主義に立つ教育で、当時の商人として成功した者は、何れも取引物資に対する確かな目利であつたと言われましよう。

荷向屋や大きな仲買人は、干花だけでなく、生花を買入れることが多かつたので、自分で干花にしなればならなかつたのです。大量の生花であつたから、随分忙がしなかつたのでなしに、天候の加減で干方が不充分になつては、その品質がひどく落ち、大きな損失を招く恐れがあつたから、この点についてもよく書き記してあります。

花の寝せ方に就いては、別に目新しい秘伝のようなものは書いていませんが、霖雨の節

にか、リ、生花が干兼ねると、床の中で腐れる場合が多いので、それを防ぐために色々な方法を授けております。従来そうした恐れが生じた時は、井戸の中につるし下げてその腐れを防いだり、或は壁にくっつけて乾燥させたりする方法が行われていました。村居は「粗とおし籠を集め、是に花もちを拵え入れ、つるし置き、下夕にけし炭をおこし、ぬかをかけ、火ほんのりとあたるようにし、火干しに成さるべく候。けし炭なくば、かた炭にても、ぬかよくかけて、火勢を和らかにして干すべし。籠敷よくなくば、すだれ虫喰不明」らしい。たゞるに干してもよしと云う。この場合の秘伝といふのは、火勢をやわらげて乾燥させるといふことにあるのでしよう。「紅藍着説」では「雨天なれば、竹にて巾三尺長さ六尺に編みたる物へ載せて、下に火を置いて乾し上る。此台を仙台にて「ヒロウ」しまた「コハナダイ」しと云うしとあり、その外にも火を用いることを書いたものはありますが、消炭の使用とか、ぬかのかけ具合という点にまで、細かく觸れているのはありません。

以上のように、やがて幼主が成長し、自ら商売を始めようとした時、未経験なことから、思わざる失敗を招かざるように、産地の送る方、生花や干花の買方、生花の寝せ方から干花の作り方まで、自分の長い間の経験を基に、筆を尽して書き示している村居の心情といふものは、実に美しいと思えます。それは、六月の畑一面に咲き誇る最上紅花の、心にくい道に落ちついたあの色合の美しさにも似たものであります。しかも村居としては「紅花は諸方へ差向け候し大切な国産物でありますから、單に稻村家の将来を慮って書いたというだけではなくして、国産としての振興と、その名声の保持ということも、充分に意

識してのことであつたらうと思われまゝ。

第六話 紅花商人たちの金融

紅花売買の資料を見ていて、私の最も驚くのは、地方の仲買人や荷向屋の人々が、数千金数百金という資本を、どうして動かしていたかという問題であります。最上地方の貧乏な農民たちの生活は、秋の收穫でもって、春の雪消えまで持ち続けることの出来る者は、先づ一人前と言われ、端境期の盆前迄持ちこたえる者は、村でも何人としかないなかつたのです。現金収入として唯一の紅花が出廻るのは、丁度この頃一六月から七月にかけてでありましたので、紅花畑を持っている農民は、それこそ一日千秋の思いでこの収入を待っていたのも当然でしょう。しからばこの売上げ収入は、どのように使用されたか、二三の例を上げます。

一、「困窮の百姓共、年々紅花咲候を待ち兼ね居り、其日其日生花にて売拂い、御年